

棚田嘉十郎関係資料の寄贈

平城宮跡保存運動の先覚者、棚田嘉十郎（1860年～1921年）関係の資料が奈文研に寄贈されました。嘉十郎の遺品など計20点です。これらは嘉十郎の死後、ご子孫によって大切に保管されてきましたが、このたび嘉十郎の孫の妻とその子にあたる棚田てる子氏・棚田正彦氏より、平城宮跡に関わりの深い奈文研に寄贈していただくこととなったものです。

棚田嘉十郎は奈良で植木職人をしていましたが、明治～大正時代、平城宮跡の重要性を訴え、第二次大極殿・朝堂院地域の保存運動には中心となって奔走しました。しかしその過程でのトラブルから自死



棚田嘉十郎翁遺影（寄贈資料より）

したという、まさに生命を平城宮跡保存に捧げた人物です。今回寄贈された資料は、嘉十郎の人柄・保存運動の実態を知ることができる貴重な資料です。今後、奈文研で大切に保管・活用していきます。

（文化遺産研究部）

発掘調査の概要

朝集殿院南門の調査（平城第326次）

平城宮跡の壬生門の北側には、朝集殿院という区画があると考えられています。この区画はまだ部分的にしか発掘調査が及んでいないことから、奈良文化財研究所では、今後数年をかけて朝集殿院地域の発掘調査を計画しています。初年度は、朝集殿院の南門の存在を確認することを目的として2002年1月から発掘調査を開始しました。調査面積は約1050㎡です。

南門は後世の削平により、基壇上部はほとんど残っていませんでした。しかし、基壇を造る際、地面に穴を掘り、土を層状につき固めて強固な地盤にする「掘込地業」と、基壇外縁に敷く化粧石である「地

覆石」の抜取痕跡が検出できました。その結果、基壇の大きさと位置がわかり、第二次大極殿院南門とほぼ同規模であることが判明しました。そのほか、南門の北側で朝集殿院内の遺構もみついています。今後は、北側の朝堂院にみられるような下層の掘立柱建物があるかどうかなど、遺構の確認調査を中心に、3月末までの予定で調査をつづけます。



朝集殿院発掘現場（北東から）

西大寺法寿院の調査（平城第341次）

西大寺法寿院の庫裡改築にともなう事前調査を2002年1～2月に実施しました。調査区は東西8m、南北7mで、北側の一部に張り出しを設けました。予想に反して後世の攪乱が少なく、黄白色砂質土の地山が地表下30cmで現れ、この面で遺構を検出しました。遺構は大きく奈良時代と江戸時代以降に分かれます。奈良時代では、西大寺造営前の平城京右京一条三坊六坪の西北隅部における宅地の掘立柱建物や塀が3時期あることを確認しました。柱穴の大きさは一辺が70cm前後。江戸時代以降の遺構は井戸と溝などで



法寿院発掘現場（東から）

西大寺四王堂の調査（平城第342次）

西大寺四王堂の西側放水銃移設にともなう事前調